

単純X線撮影における生殖腺防護具使用廃止に向けた取り組み

岩手医科大学附属内丸メディカルセンター 中央放射線部 ○本庄 真宙(Honjo Mahiro)
岩手医科大学付属病院 中央放射線部 岩城 龍平 佐々木 忠司

【背景・目的】

2021年1月に米国放射線防護審議会（NCRP）から腹部、骨盤部の単純X線撮影時における生殖腺遮蔽を終了する勧告が公開された。日本でも同様の動きがあり、日本放射線技術学会においても生殖腺防護具の使用廃止を推奨している。当院でも全脊椎撮影、股関節撮影、小児の胸腹部撮影などで実際に生殖腺遮蔽を行っている。そこで今回、当院の一般撮影およびポータブル撮影における生殖腺防護具の使用廃止へ向けた取り組みについて報告する。

【方法】

生殖腺防護具使用廃止に伴い、まず施設内でのコンセンサスの取得を行った。それと並行して患者説明用リーフレットとポスターの作成、患者対応のフローチャートの作成を行った。作成後、部内勉強会を開催し、診療放射線技師内での知識の共有を行った。また、医療従事者への認知度や現状調査を目的としたアンケート調査を行った。

【結果】

1.コンセンサスの取得

コンセンサスの取得は放射線科医師から医療安全推進委員会の放射線部会へ提案し承認後、医療安全管理部を通して病院長通知に至った。およそ1か月で運用開始となった。

2.リーフレットとポスターの作成

リーフレットとポスターは以下の通り作成した。(Fig.1、2) 記載内容は生殖腺遮蔽の説明、廃止する理由、今後の方針についてである。廃止する理由については、股関節周辺部の重要所見を隠す恐れがあること、遺伝的影響は無視できるくらい小さいこと、撮影装置の技術の進歩、生殖腺の位置に個人差があることを記載した。今後の方針としては適切な線量で撮影し、可能な限り照射野を絞ることで最適化するよう努めることを記載した。

3.患者対応のフローチャートの作成

基本的な説明は撮影前にお渡しするリーフレットで行う。質問があった場合は撮影担当技師がFAQ



Fig.1 当院で使用しているリーフレット（三つ折り）



Fig.2 当院で使用しているポスター

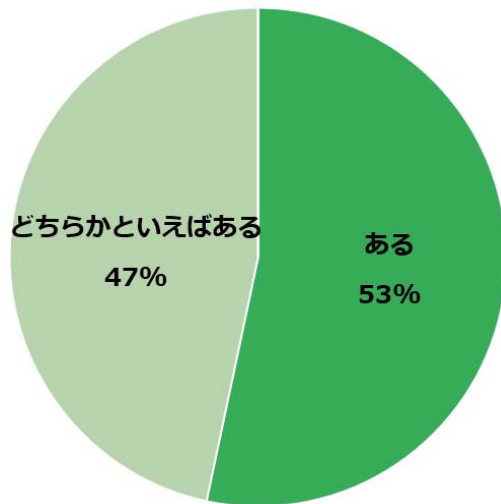


Fig.3 日常業務で被ばくを意識しているか

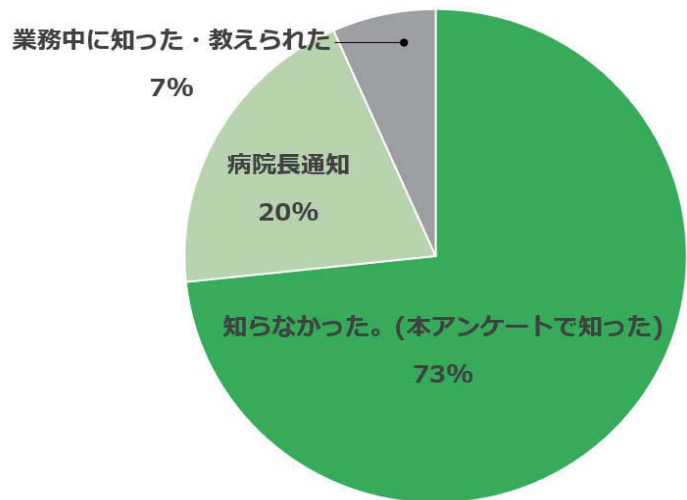


Fig.4 生殖腺防護具使用廃止をどこで知ったか

集をもとに説明することとした。説明をしたうえで同意が得られない場合は生殖腺防護具をつけて撮影する。

4. 部内勉強会の開催

部内勉強会ではリーフレットやポスターの運用方法を含めた患者説明の共有を行った。また、基礎的知識の統一や2病院の施設間での対応の共有を行った。

5. 医療従事者へのアンケート調査の結果

アンケートは小児病棟の看護師15名に行い、結果は以下の通りになった (Fig.3、4)。生殖腺遮蔽の印象については、撤廃となった経緯や根拠を知りたいといった意見や、安全性の面で大丈夫なのかといった意見が挙がった。放射線に関する疑問点については、家族への説明はどうするのか、放射線被ばくや放射線そのものについて学ぶ機会が欲しいといった意見が挙がった。

【考察】

生殖腺防護具使用廃止の運用を開始後の問題は現状ない。この現状は患者の関心の低さなのか、運用自体が順調に進んでいるのか判断ができないため、今後患者アンケート調査を実施し評価していきたいと考える。また、リーフレット配布のタイミングについても改善していく必要がある。現在は撮影前に配布しているが、オーダー発行時に医師から渡すことで十分な理解を得たうえでの撮影になるかと考える。また、配布から読み終わるのを待つまでの時間も削減できるため撮影の効率化にもつながる。アンケート内容の結果からも放射線についての理解が不十分なことや生殖腺防護具使用廃止の経緯の理解や周知が足りないことが分かったため、多職種合同で放射線に関する勉強会の実施が必要かと考える。

【結論】

当院の単純X線撮影における生殖腺防護具使用廃止に関する運用を確立できた。